

牧師室から (2021.5.23)

以前、牧会で困難になっていた折、信徒から一冊の本を頂いたことがある。当時ベストセラーとなっていた『置かれた場所で咲きなさい』(渡辺和子著)である。勿論内容も悪くないのだが、配慮して本を贈ってくれた方の思いに励まされた。

先日書店で、『植物はなぜ動かないのか』(稲垣栄洋著)という興味深いタイトルの本を見つけ、それからすぐに前掲の本を思い起して懐かしくなり、買って読んでみたら、考えさせられることが実に多かった。

植物は動かないというのは当たり前過ぎるのだが、それをあえて問い直している。そこで思ったのだが、これは我々人間など動物からの視点であり、植物から見れば、動物たちは何でそんなにあくせく動くのだろう、と思うに違いない。植物は動かなくても自分で栄養を作れるけれど、動物はそれができないのでエサを得るために動き回らなければならないのだ。それを見る植物は、動物を何と不便で可哀想な生き物だと思っただろう。また「植物は動けないから、逃げることなく環境を受け入れて、自分自身を変えている」。人間は相手が自分の思うようになってほしいと望むことがあるが、大概それは適わない。そのような時には自分自身が変わるしかない。植物にはそのようなしなやかさが生来備わっている。それに「置かれた場所で咲きなさい」というように、アスファルトの裂け目で咲いている花などは、ニッチに生きるしたたかさを持っている。このように思い巡らすと、われわれ人間は植物から学ぶことが多いと言えるのではないか。

「・・・野の花がどのように育つか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか・・・」
(マタイ 6:28~30)

(鈴木淳一牧師)